

ガボール島であった。この日、日本は第二次世界戦争に参加し、私たちは不眠不休、マレー半島攻略戦に猪突した。

翌一九四二年の二月十五日、私たちは初めてシンガポールの市街を見た。シンゴラ上陸以来七日、夢にまで思えがいていた世界史の決定的一瞬間であった。

シンガポールの攻略は一週間で、五千余人の戦死傷者を出した。これは、マレー半島攻略戦五十五日間の戦死傷を上回る数字であった。

その数日、私たちはもう弾丸がなく、夜間の白兵戦だけを頼りに戦っていた。その朝、私たちの大隊では一ヶ中隊全滅した。が、日中はどうしようもなく、私たちはいよいよ全員必死を期し、その日の暮れるのを待っていた……。そういう二月十五日の午後、英軍は降伏したのである。信じようがなかった。しかし私たちは勝ったのだ！

私がエルシーと初めて会ったのは、その直後である。彼女は全裸で恥ずかしい目にあうところだった。殺伐な戦場から、その異様な一室へ踏みこんだときの私の動転は、とうてい説明できるものではない。彼女の真珠色の肢体は神祕で、欧亚混血娘特有の瞳が黒々と大きく、白い肌に乱れかかった髪が、とても黒かった。

その日、イギリスの東洋支配の大根拠地シンガポールに、百二十年間ひるがえっていたユニオン・ジャックはおろされ、かわって日章旗が掲げられた。この瞬間、アジアのナショナリズムは点火さ

れ、ヨーロッパ人の世界支配の歴史に、巨大なピリオドを打ったのである。

シンガポールは昭南と改名され、日本の領有するところとなった。その領有はしかし、たった三年半でしかなかった。

一九四五年八月十五日、日本は無条件降伏した。その日まで「降伏」ということを知らなかった数百万の在外将兵は、突如として信じがたい世界に放り出されたわけで、世界中の人びとの観劇的興味をそそるエピソードを、アジアの全域で狂演した。私もその群像の中の一人であった。

そのとき、私は再び昭南にいた。その重要な戦略地点を防衛するため、五千キロの赤道海を舟艇機動によって移動し、ようやく昭南へたどりついてから、わずか一ヶ月後のことであった。

そのとき私には、とるべき道が二つあった。一つは死ぬること……。一つは生きて帰ること……。

私は結局、生きて帰った。

私には幸福ということがよく判らない。私に判っているのは「人生には結局、一つの結末——死——しかない」ということだけである。

このロマンチックなドキュメントは、私としては、日本人よりも外国人に、より多く読んでもらいたい。

昭和三十八年、このロマンの一部が、週刊誌や新聞で紹介されたとき、私は多くの便りをいただき、本を書くことを約束した。アメリカからの便りもあった。それら多くの人びとに約束したこと

を、私は今ここに、ようやく果たしたのである。

この本を出すために絶大な御尽力を惜しまれなかった本多喜久夫氏と、原書房社長成瀬恭氏とに、
ここで深い謝意を表しておく。

一九六七年夏

越智 存海

目次

まえがき

第一章 運命の航路

- ねずみ移動……………一
- ロンドン病院……………二
- 赤道……………六
- 昭南・昭南……………三
- 陣地構築……………六
- 防衛司令部……………三
- 再会……………九
- 鮮紅色の果実……………四

三階で……………	五六
茶釜と玉碎……………	六五
戦陣訓……………	七三
軍事郵便……………	八二

第二章 怒濤の如く

シドニー放送……………	九四
チャンギー收容所……………	一〇〇
陣地作業中止……………	一〇六
痙攣……………	一一二
狂乱第一波……………	一一八
マレー共産軍……………	一二七
埠頭警備……………	一三五
英印軍上陸……………	一四二
兵籍偽造……………	一四八

狂乱第二波……………	一五四
人体改造……………	一六一
検問……………	一七三

第三章 道遠けれど

スコールは塩辛い……………	一八一
月が泣いた……………	一八六
青い海の町……………	一九四
インド人軍医……………	一九七
夕焼けの丘……………	二〇三
インド人大尉……………	二二二
地雷爆発……………	二二八
白人副官……………	二三四
副官のプレゼント……………	二三三
カクテル・パーティー……………	二四一

鬼少佐……………	二四八
男と女……………	二五九
チャンギーへ……………	二六九

第一章 運命の航路